

戦争と看護



普通寺陸軍病院の軍医と看護婦生徒50人の集合写真
最上段右から2人目が公家文子さん

毎年8月号では、8月15日の終戦記念日に合わせて、戦争の記憶を風化させないために、平和について考える特集を組み、市内で起こった悲惨な出来事や体験などを紹介してきました。

今年は、軍隊に付き従い野戦病院などに勤務して医療活動を行った女性看護師である「従軍看護婦」にスポットをあてました。兵士ではない女性たちが延べ35,785人も日中戦争や太平洋戦争の最前線に送り出され、そのうち1,137人の方が亡くなったことはご存じでしょうか？

戦争と看護。この「生命」をめぐる根源的な矛盾をかかえたまま、彼女たちは野戦病院や病院船で傷病兵の救護にあたりました。それは敵・味方の区別なく、博愛の手を差し伸べるという看護の本来の姿とは、かけ離れた現実でした。

ある人は、生体解剖の助手としてメスを握り、またある人は、瀕死の状態の兵士に安楽死を実行した例も…。

こうした戦地へ赴いて体験した話ではありませんが、赤岡町在住の公家文子さん(85歳)の普通寺陸軍病院(現独立行政法人国立病院機構普通寺病院)で従軍看護婦になるための勉強や訓練をした、ご自身の体験談を紹介いたします。

—従軍看護婦への道— 公家文子

普通寺陸軍病院へ

私 は昭和19年7月、18歳の時、当時通っていた女子青年学校を中退しました。「君に忠 親に孝」と教えられ、お国のために尽くし、両親に肩身の狭い思いをさせたくない一心で入隊を決意。従軍看護婦の採用試験に無事合格しました。そして同年11月、香川県普通寺市にある普通寺陸軍病院の看護婦生徒一期生として入隊しました。

父に付き添われトランク1つ抱えて病院の門に到着すると、門衛2人に採用通知書を見せるや否や父と「ありが

100人の共同生活

とう。さようなら」の言葉を交わす間もなく兵舎へ連れて行かれました。その後、婦長さんに後ろ髪をバツサリと切られました。

病 院には四国四県から100人の生徒が集い、出入口二つ板の間の大部屋で寝食をともにしました。寝床は15cmほどの藁布団を敷き、枕元には防空頭巾と靴を置きました。冬場は「四国の北海道」と言われたほどとても寒く、体温を奪われないように体を寄せ合って

終戦を迎え帰途へ

戦 地に送られる前に、8月15日の終戦を迎えました。私は腸チフスという感染症にかかり、伏見分院に入院していました。ラジオで玉音放送を聞き、日本が敗戦したことを知り号泣。普通寺陸軍病院へ戻ると看護生は誰一人としておらず、私は荷物を持つて普通寺駅へ向かいました。衰弱している体で持てる力を振り絞って駅の階段を上り、何とかホームへ。やっと、汽車に乗り無事に実家へ帰ることができました。

絆・人情・そして平和

今 こうして生きていられるのは、つらい戦争体験を乗り越えられたから。同じ釜の飯を食べ、一緒に苦勞した仲間、切っても切れない「絆」で結ばれています。現代社会は隣近所を知らないなど、閉塞感が漂う暗い世の中になつています。向こう三軒両隣、人情あふれ血の通う人間関係を築いていくことが大切だと思います。

戦争の悲惨さ、残酷さを知っているか

過酷な訓練・実習

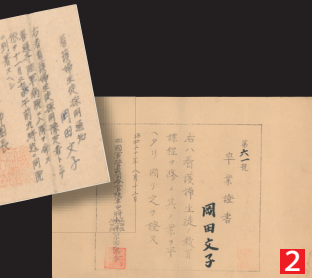
7 時に起床し、点呼が終わるとすぐさま校庭に二列横隊で整列。午前中は座学で、教科書がない中で医学の勉強をしました。また、軍隊の規則である内務令や礼式令、五箇条の御誓文を必死で暗記・暗唱しました。

午後からは「教練」と呼ばれる実習・軍事訓練。練兵場では、たとえ遠くいても「敬礼！」が聞こえたら、その方向に敬礼をしました。体温計の先についている水銀を割らないように、人差し指に押し付けて行軍。物資の乏しかった時代でしたので、医療器具は武器と同じように大切に扱うようにたたき込まれ

ました。実習中に注射器を割り、怒られるのが怖くて、ポケットに隠したまま一晩中眠れなかったことも。また、満濃池へ行軍した時には途中で貝の塩辛を食べ、田んぼの水で喉を潤したことも思い出されます。

さらに、霜柱の上で片手で担架を持ちながら匍匐前進を繰り返したり、真冬に兵舎の長い廊下の拭き掃除をした時には、霜焼けで手がグローブのように何倍も膨れ上がるなど、とにかく厳しく苦しい日々を送りました。一回だけ外泊した時に、その腫れ上がった手を母親が見て涙をぬぐったことも今も忘れられません。

最もつらかったのは、詫間(香川県三豊市)の飛行場が空襲を受けた際、負傷兵が運ばれてきて治療にあたった時です。手足がなかったり、腸が出ていたりしている兵士を目の当たりにし、注射器で膿を吸い出す光景は本当に残酷で地獄でした。素手のまま傷口をガーゼで拭き、洗ってはまた拭くの繰り返しで、不衛生も極まりない状態でした。



1 普通寺陸軍病院で看護生だった公家さん。国防色(帯青花褐色)の看護衣と「軍袴」と呼ばれる兵隊用のズボンを着ている 2 採用通知書と卒業証書 3 平成9年の看護生との同窓会で、当時の衣装を再現。左が公家さん。苦勞をともにした親友は、一生の財産となった。



公家文子さん(85歳・赤岡町)

普通寺陸軍病院を卒業後、国立療養所東高知病院などで約50年間看護師として勤務。

※野戦病院・病院船

負傷者を野外または船舶で治療する大規模な移動式救護施設のこと。